

気付いたら究極の男になつてた件について

藤崎風花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はい。文字通り白竜に転生しました。……いやなんで？
取り敢えず他の皆にバレないように頑張りたい所存。まあ究極を目指せば良いんじやないですかね知らんけど。
でも転生してすぐに思った。これ無理じやね？

目 次

究極の男に転生。そして現実を知る	1
練習試合開始。分からされる実力の差	6
練習試合。実力と誤りと誤認	12
練習試合。裏の暗躍者	18
練習試合終了。龍と神	24
思わぬ邂逅	35
天才と天才。故に天才在り	45

究極の男に転生。そして現実を知る

「だれだ、こいつ……」

鏡に映る自分自身の姿を見て、俺は無意識にそう呟く。

脳裏に浮かぶ幼年期の記憶。それと共に、前世の記憶が一気に流れ込んでくる。

それによる痛みで頭を押さえるが、とある単語が脳裏に浮かんだその刹那、俺はハツとしたように再三鏡に目を向けた。

——イナズマイレブン。

極度のサッカーバ力である円堂守が、日本一になつたりエセ宇宙人と戦つたり世界一になつたりする過程を描いたもの。元々一つの短編ゲーム作品だったが、アニメ化や漫画化等を経て、長く愛される人気作品だ。無印と呼ばれる円堂時代三部作が終了し、GOと呼ばれる天馬時代へと繋がっていく。他にも戦神三部作と呼ばれる無印からのパラレルワールドの世界も展開されている。

炎が纏つたシユートや地中から出て来るペンギンなど、この作品が『超次元サッカー』と呼ばれる所以はその迫力満点の必殺技にある。ストーリーに直接関わらない、所謂モブと呼ばれる選手すらも皆必殺技を持つており、試合の勝敗は必殺技の威力が左右するともいえるのだ。

……そんな世界に転生したのだから、自分の実力が関係しないモブに徹したいと思うのは当たり前の事だろう。だが、そんな儂い思いはすでに否定されている。

「…………なんで白竜なの？」

——鏡に映る銀髪の少年。その容姿は“究極の残念なイケメン”こと、白竜そのものだった。

「……、これは何のザマだ？白竜」

「……」

ゴットエデンの選手育成場。その一角で、桃色のスーツを着込んだ男——牙山道三が諭すように。否、怒りを露にしながら俺を睨みつけている。

俺の記憶が正しければ、確か白竜はゴットエデンにいる選手達の中で一番の実力を持っていた筈だ。……亡靈であるシユウや一時的にこの島にいた剣城を除いてだが。

で、そんな実力者が一夜にして滅茶苦茶弱くなつていたらどう思われるだろうか。

「……何故化身を出さない。何故化身が使えない！プロジェクトゼロに相応しい実力がないのならば、貴様はすぐに廃棄する事もできるのだぞ！」

うん、怒るのも無理ないよね。

元々白竜本人の身体だったからか、ちゃんと一通りの技は使えていた。でも俺が白竜の身体を使いこなせてないのだろう。それらの必殺技の威力は軒並み弱弱しかった。現にそう牙山の顔に書いてあつたし。

まあ牙山が怒っているのは必殺技ではなく、俺が化身を使えなくなっているという所なのだが。

前世の記憶曰く、化身というものは選手の気力が高まると姿が具現化する——つまり選手によつて具現化する化身はそれぞれ違うのだ。

元々の白竜の化身は『聖獣シャイニングドラゴン』。大量の光と共に

に現れる神聖な龍の化身。

だが、それは“白竜”という選手の気が具現化したものだ。身体は同一でも精神が全く違う俺が同じ化身を出せと言われても無理とか言えない。

それでも俺が転生者だという事を誰にも伝えていない手前、牙山が怒るのも仕方の無い事だ。

それほどまでに、白竜がフィフスセクター及びプロジェクト・ゼロにとつてかなり有用な人材なのだろう。

「ふん。そんなものでアンリミテッドシャイニングのキャプテンが務まるのか。……これはチームゼロの採用選手も考え直さなければならぬな」

牙山からの嫌味には「すみません」と取り敢えず謝つておき——何故か牙山は驚いたような顔をしているが——、俺は唯一の出入り口である横開きの自動ドアへと歩き始める。

これ以上俺がここにいた所で、牙山も俺も気分を悪くするだけ。それならば少しでも早くこの環境に慣れる為に練習した方が良いだろう。……幸いにしてまだ誰も俺が転生者である事は気づいていないのだから。

「…………どうしたんだ？ いつものお前らしくもない」

……なんだろう。急に気づかれてないという自身が無くなつた気がする。

俺がその事に気付いたのは、本当に偶然が齎したものだった。
白竜と牙山教官の会話。これだけならいつも通り、牙山教官に白竜

が文句言つてゐるだけにしか見えないだろう。それならと、少し位盗み聞きでもするかと思つてドアに寄りかかりながら聞いていたのだが——余談だが、俺は他メンバーに比べてかなり聴力が強い——、普段の彼からは絶対と言つても良い程発せられない言葉が聞こえたのだ。

『すみません』

他のメンバーならただ謝つただけと、そう判断できる。だが、白竜が素直に謝る事は絶対ない。これだけは絶対と言い切れる。あの究極バカは俺達の事など眼中にないのだろうから。いや、明らかに眼中にないだろう。少なくとも俺達に対してはあいつは一回も謝罪した事はない。

そこから生まれた疑問は、牙山教官の表情によつて確信へと変化した。

牙山教官の表情から、恐らく白竜は教官達に対しても一回も謝罪はした事はないのだろう。それぐらい牙山教官の顔は驚愕に満ちている。

今日の白竜は何かが可笑しい。今までのよだか傲慢さも、チームを纏めるキヤブテンとしての素質も感じない。……後者は以前までの白竜も微妙ではあつたが。

「…………どうしたんだ？ いつものお前らしくもない」

「…………蛇野か。ごめんな、ちょっと一人にしてくれ」

やはりだ。いつもの白竜よりもかなり優しめな言動。化身が発動できなかつた故に落ち込んでいるのかもしれないが、やっぱり俺や教官に謝るのは不自然としか言いようがない。

だから俺は、通り過ぎて自分の部屋へ向かおうとしているであろう白竜に、ある一つの提案を持ちかける。

「白竜、PKでもやらないか？」

どうせ今から練習するつもりだつたのだ。それならば相手がいた方が効率が良い。

もしかしたら白竜も化身を取り戻せるかもしれないし、必殺技の調子が戻るかもしれない。

それらの理由から白竜を誘つた——否、それらの理由は建前でしかない。

白竜のシユートは今までに何万回と受け止めた。勿論受け止めた時の感覚も未だに手のひらに残っている。白竜のシユートの強力さは、GKである俺が一番よく知っている。

それ故に、今の白竜のシユートを受けてみれば少しばらアドバイスが出来ると、そう思つたのだ。白竜が不調のままだと、明々後日に控えているエンシヤントダークとの練習試合、それに反旗を翻しているチームとの試合にも支障が出てしまう。最近は雷門を中心に次々とファイフスセクターに反乱を起こしているらしいしな。

「……ああ。今の俺で良ければ相手になるよ」

白竜が了承してくれた事に安堵し、それと共に俺は氣を引き締める。

もはや別人のようになつてゐるとはいゝ、相手はあの白竜。油断していればすぐに負けてしまうだろう。それに注意深く見ていないとアドバイス等できないしな。

そんな事を思いながら、俺は白竜の後に続く形でグラウンドへと向かうのだった。

練習試合開始。分からされる実力の差

(……なんか面倒な事になつたなあ)

サッカーグラウンドのゴール前。気迫に満ち溢れながら構える蛇野を見ていると、余計に不安になつてくる。

化身も出せず、必殺技の威力も不十分。ゼロの正GKにまで選ばれる蛇野を破れるとは到底思えない。

……だが、彼の申し出を断れなかつたのもまた事実で。

もしかしたら原作の白竜のようになれるのかかもしれない。そんな願望があつたのか、俺は蛇野の提案を受け入れてしまつたのだ。

——彼を破る事など、出来る訳無いのに。

「ホワイト…………カリケエエーンツツツ!!!!」

足を振り下ろすと共に小さな光の竜巻が現れ、蛇野へと向かつていく。

技 자체は成功。だが、その威力はまるで赤子のように弱弱しい。全力で放つたところで蛇野には絶対通用しないと、そう現実を思い知らされる。

「ハアアアツ!!!」

決まる訳がないと分かつっていても、ただのキヤツチで止められるとちよつと傷つくな。まあ、それだけで止められる位、俺のシユートが弱いという事なのだが。

「ほら、もう一回うつてこい！」

「え、なんで……？」

「何回もやれば、自然と感覚は戻る筈だからな」

「ええ……」

余りにも気楽すぎな思考だが、俺が転生者という事がバレていないだけまだ良いと考えるべきか。

でも、蛇野の言う通りだ。何度も練習すれば少しずつ上手くなつていく筈。俺もイナイレ世界の恩恵を受けているのならば、原作の白竜と同等、そしてそれ以上の実力を手にする事も非現実的ではない。非常に厨一心が燻られるではないか。

「…………よし。ホワイト…………ハリケエエーンツツツ!!!」

そう叫びながら放つた光の竜巻は、先程までよりもほんの少し強くなつた気がした――。

ゴットエデンの教育施設に用意されているゴットエデンスタジアム。今日あるエンシヤントダークとの練習試合にも使われる、原作で雷門とゼロの決戦が繰り広げられたスタジアムだ。

そんなスタジアムのアンリミテッドシャイニング側の控室にて。俺は皆に異物を見るような目で睨まれていた。……どうやら牙山から俺の不調（という事にしておいた）は聞かされていたらしく、この様子から皆俺には期待していないのだろう。目線が痛く突き刺さるが、変に期待されるよりは気が楽だ。

「…………さて。これから始まるエンシヤントダークとの練習試合だけど、白竜が不調な以上、必然的にシユートをうつのは帆田さんにお願

いする事になる。いけるかい?」

「ああ。任せてくれ」

このチームの司令塔のような存在であるMF—— 笹山滝が、もう一人のFWである帆田光洋へとそう聞く。その思いに応えるように、帆田は力強く頷いた。

「後はMFも積極的に上がつてほしいな。DFは一応待機。そして白竜はどうしりと前線で構えてほしい」

アンリミテッドシャイニングには11人のメンバーしかいない為、俺をベンチに下げるという事が出来ない。エンシャントダークには適う気がしないからベンチにいたかったのだが、このチームにこんな欠点があるとは思つてもいなかつた。笹山のこの指示は、それに対する精一杯の回答なのだろう。

エンシャントダークに俺の不調が伝わつていないと前提になるが、恐らく俺には2人か3人程マークがつく筈だ。その隙を突いて帆田やMF達がシユートを決める。言わば囮役という事だ。

笹山のこの案に異を唱える者はいなかつた。皆、現状これが一番良い事だと理解しているのだろう。

『——では諸君、グラウンドへと集まりたまえ』

そろそろ試合を開始するという趣旨の牙山による放送が流れ、メンバー達が続々とグラウンドへと向かっていく。終始無言で行つて、その移動には、剩え霸氣すらも感じられる。

「……白竜」

「大丈夫。精一杯囮役に勤めるから」

「……………そうか」

皆に続こうと、立ち上がりつて歩き始めたその瞬間、蛇野に声をかけられた。

自分の役目に勤めると伝えたが、蛇野の表情は芳しくない。……何か気になる所でもあつたのだろうか？

コイントスが行われ、キックオフはアンリミテッドシャイニングからに決まる。

お互に相手を睨み合い、終始無言の状態で試合が開始した。

「帆田、頼んだぞ」

「…………まさかお前が馬鹿正直に従うとはな。任された」

白竜から帆田へのパス。そしてそれをダイレクトでサイドにいる青銅に渡し、帆田は前線へと切り込んでいく。

対して白竜の方には、枝木に野谷、路野といったエンシヤントダークが誇るDF陣がマークについていた。

（よし、やつぱり俺にマークがついたな。後は帆田が決めてくれるはずだ）

白竜は心の中でそう思い、マークが離れないように少しづつ身体を動かしながら、現在ボールを保持している青銅へと視界を向けた。

「来い！精銳兵ポーンツツ！」

青銅が呼び出したのは、白を基調としたチェスの駒のようなドリブル化身。相手のFWであるカイがここまで戻つてくるが——。

「邪魔だツ！マシンガンビートオオツツ!!!」

「…………やるじやん」

まるでコテンパンに痛めつけるかのように、ポーンの拳がカイの身体を殴り飛ばした。

そしてボールは帆田の元へ。

「バウンド……フレイムウウウツツ!!!」

一回地に落とし、摩擦によつて燃え上がる炎を纏つたボールが再度地上へと飛び出で来る。彼はそのままボールを渾身の力で蹴り放つた。

「…………その程度か。キルブリッジイイイツツ!!!」

だが帆田が放つた渾身のシュートも、エンシャントダークのGKを務める芦矢の敵ではない。手から放つた闇の衝撃波でシュートの威力を弱めると、そのまま軽く止めて弾いて見せた。

帆田の渾身のシュートが止められ、一瞬の焦りと驚愕がアンリミテッドシャイニングのメンバーに奔る。…………その一瞬さえあれば、点を決める事などエンシャントダークにとつては容易い事だ。

「少しごらう本氣を出しても良いんじやないか？決めてやれ、シュウ！」

「ああ…………ブラックアッシュ——」

弾かれたボールを拾つた元乃がシユウにバスを出し、それを目を瞑つたまま受け取る。

そして自身の技を呴くと、暗黒の闇がどんどん、ボールへと纏つていった。

「——はああああツツ!!!」

目を見開き、そう叫びながら、シユウはボールを蹴り放つた。放されたボールは加速しながら暗黒の渦を巻いていき——。

「——なにツ!?

——構えていた蛇野に技を使わせるまでもなく、ゴールにシユートを叩き付けた。

練習試合。実力と誤りと誤認

シユウのシユートがゴールへと叩き込まれ、エンシャントダークが先制点をもぎ取る。

アンリミテッドシャイニングの速攻に合わせたカウンター。エンシャントダークが臨機応変に対応できるように調整してきたから、一番警戒していた白竜ではなく帆田がシユートを放ってきたから、〈ラックアツシユ〉がどんどんと加速していく技だから。それらが複雑に組み合わさったが故の一点。蛇野相手にはもう二度と決まらないであろう戦法。だが、その一点さえ取れれば十分だ。

（先制点を取れたのは良い。でもあの状況で白竜に渡さない……やつぱり彼は何かが可笑しいと見て良さそうだね……）

ふと、観客席に一人座っている牙山を見つめるシユウ。

足を組んで偉そうにこちらを見下してくる牙山は、文字通りニヤニヤと笑みを浮かべていた。彼が今どういう心境なのが、その気持ち悪い表情からは読み取れない。ただ、機嫌はそこまで悪くはなさそうなだけ。何を考えてるのか分からるのは、洞察能力に優れたシユウにとつては何とも歯がゆいものだつた。

（まあ、あの人の考えが分からるのはいつもの事だし別に良いけど……白竜の実力も把握しておきたいし、皆に白竜にボールが行くよう言つてみようか）

最悪の場合、化身で無理やりにでも点を奪う事は可能だ。シユウの〈魔王の斧〉や林音の〈ギャロップバスター〉なら、蛇野からゴールを奪う事は容易いだろう。

でも、それだと他のメンバーがチーム・ゼロに選ばれる可能性が低くなってしまう。化身が使えない分、他の様々な技量によつて選ばれるのは当たり前の事。シユウ自身はそこまで興味はないが、選ばれる

ために必死に練習しているチームメイトを後押しするのはキャプテンとして至極当然の事。だから勿論白竜の放つシユートはシユウも全力で止めに行くし、そこから情報戦を仕掛ける。それが、現状シユウの考える中で一番この試合を制する事ができ、また今後に有利に働くであろう戦法だった。

そうと決まれば皆にそう伝えにいこう。そう思い、シユウは皆のいる自陣へと足を進めた。

先制点を取られたアンリミテッドシャイニングから試合再開。白竜から帆田、青銅へとボールが周り、ドリブルし始める。だが先程のカウンターで慎重になつたのか、野谷が向かつてくるのを確認すると笹山へとバックパスをした。

「もーらいつと」

「しまつた……！」

鋭いスライディングで笹山からボールを奪取するカイ。体勢を立て直してからシユウの方を見ると、彼の表情は「手筈通りに」と、そう言つているかのようだつた。

（まつたく……ウチのキャプテンはどうしてこうなのかね……）

内心でそう愚痴を吐きながらも、先程シユウに告げられた言葉通り、白竜の近くにいる枝木へと大きくバックパス。元々の身体能力の高さとFW故のキック力が成せるパスだ。

「させるか！」

「…………くくっ」

これを好機と見た白竜が、枝木からボールを奪取。すれ違いざまに聞こえた押し殺したような笑い声に疑問を覚えるが、考えている暇はない振り切る白竜。そして帆田へと繋げようと彼の方に視線を向けるが――。

「はつ…………？」

帆田を取り囮むように二人のD Fがガツチリとマークしていた。帆田に繋げるのは無理だと瞬時に判断し、M F達に打つてもらおうと後ろを見る白竜。でもその瞳に映つたのは、M F全員にマークがついている現状だった。

(俺一人だけをフリーに? 何故だ。エンシヤントダークにもバレているのか?)

「白竜! 打てええええ!」

あからさまに自分がフリーにされている事に疑問を覚え、その場に立ち尽くしてしまった白竜。そんな彼を奮い立たせるように、G Kである蛇野がそう叫ぶ。

大声に驚いた白竜が蛇野の方へと視線を移す。彼の瞳からは、『全力で決めてやれ』とそう言つてるかのように感じられた。

「…………やるか。ホワイト…………ハリケエエエーンツツツ!!!」

空中へと飛び、神々しい大風をボールへと集中させていく。

極限まで溜め込み、上方から蹴り落とす。小さな暴風を纏つた

シユートが、エンシャントダークのGKである芦矢へと襲い掛かる。

(完成……完成だ!)

そのシユートはまさしく、白竜の思い描く「ホワイトハリケーン」そのものだつた。

だが、まだGKを破つていない段階で喜ぶのは不審に思われると、そう思つたのだろう。白竜は内心でそうガツツポーズをした。

「キル……ブリッジイイイツツツ!!!」

芦矢の両手から放たれた暗黒の衝撃波が、「ホワイトハリケーン」を真正面から相手する。

一步。また一步と、芦矢を少しづつゴールへと押し込んでいく。

「うおおおおおツツ!!!」

芦矢がそう叫びながら、全身全霊でシユートを止めにかかる。

一瞬の膠着の後、またもじりじりと押されていくが、それでも芦矢は諦めなかつた。

お互の技がぶつかつた衝撃か、芦矢を囮るように小さな爆発——否、無数の光が発生した。

この場にいる誰しもが、「ホワイトハリケーン」による得点を予知した事だろう。これ程までの威力は、今までの皆が見慣っていた白竜でも出せなかつたのだから。

だが——。

「……は?」

芦矢の咳きが、そう驚いたように紡がれる。

光と煙が過ぎ去り、他の者も芦矢の姿が視界に捉えられるようにな

なつた。そして視界に捉えて脳が処理すると共に、皆芦矢と同じような反応をする事となる。

「……な、なんで――」

――なんで……完成した筈のシユートが止められているんだ……?

シユートを放った白竜が、そう認めたくないものを見るかのようにそう口から言葉を漏らす。

白竜の視界には、信じられない状況が映っている。否、この場にいる全員がそうであろう。シユートを止めて見せた芦矢すらも、驚愕を表情に浮かべているのだから。

「芦矢!」

「つー・あ、ああ!」

一番早く状況を理解したシユウが、芦矢からボールを受け取つてそのままダイレクトでシユート。

でもただのノーマルシユートが。それも自陣からのシユートなのだからゴールまで届く訳が無い。シユウだつてそれぐらいは分かっている。だから、一番の理解者であり親友に全てを託した。

「カイ!頼む!」

――そういう事か。はあああああ!!!番人の塔……ルーク!!!

シユートではなく、シユウからカイへのパス。

親友に応えるかのように化身を出現させてパスを受け取り、そしてダイレクトで放つた。

「いつけえええええツツツ!!」

『ルーク』はブロック化身故、シュートには余り期待は出来ない。だが、それは普通の状況なら。

未だ状況を理解できていない者もまだいる。というか大多数がそうだろう。それならば速度が通常技の比ではない、化身の力を上乗せしたノーマルシユートが刺さる。普段は当たり前のように止められていたも、相手に技を使わせなければゴールを奪えるのは必然的な事だつた。

「——ツ！ サーペント——ぐあああああ!!」

判断が遅れた蛇野を嘲笑うかのように、カイのシュートは無情にもゴールネットに突き刺さる。

前半12分、0—2。

双方が予期していない形ではあつたが、またもエンシャントダークによるカウンターによつて、結果的に突き放されてしまつたのだった。

練習試合。裏の暗躍者

「つあ——」

二度のカウンターによる失点。ゴールネットへと突き刺さり、その反動でコロコロと転がるボールを視界に捉えながら、白竜はそう小さく言葉を漏らした。

(……全部、俺のせいだ……)

1失点目も、この失点も、元を辿れば全て自分が原因に当たる。

“今までの白竜”が積み重ねてきた印象をフルに使い、マークをもつと自分に集める事が出来れば。蛇野との特訓の時とは比べ物にならない程に威力が高く、完成した……そう思い込んでしまった〈ホワイトハリケーン〉を決める事が出来れば。完成した満足感に浸れずに、芦矢の方へとすぐに向かつてそのまま彼が溢したボールをゴールへと叩き込めれば。そんな数々のI-Fが、そしてそれによる成功類が、白竜の脳を駆け巡る。

(俺は……)のチームにいらない?)

前まで自嘲気味にそう心の中で呟いていたが、いざ実感させられるとその絶望感に打ちのめされる。所詮自分は原作白竜の劣化——ただの一般人に過ぎない。一通りの技は覚えてはいてもそれを使いこなせないのだから、一丸となつてチーム・ゼロを目指しているチムメイトの足枷にしかならない事は火を見るよりも明らかだ。

技を使えたから。〈ホワイトハリケーン〉の威力を少しずつでも引き出せたから。それで調子に乗つて、原作白竜よりも強くなれるという淡い希望——否、願望を抱いてしまつた。ここは白竜が元々いた現実世界ではなく、イナズマイレブンの世界。現実世界の常識で考えてはいけなかつたのだ。

自分はゲームでいうスカウトモブのような存在。それも強キャラではなく、ずっとずっと弱いザコキャラ。最初から原作白竜のようにはなれない。そう上手くいくわけが無い。

松風天馬を始めとした原作キャラ達のような才能なんて有る訳がない、また彼らのように上達が早い訳でもない。少しずつでも順当に成長できるというのがせめてもの救いだろうか。

「…………面白い」

ただ、努力する事はできる。抗う事はできる。

他が1時間練習するなら、2時間でも3時間でも練習して抗い続ければ良い。どうせ牙山に廃棄されて死ぬなら、身体の限界を迎えて死んだ方がマシだ。折角のイナイレの世界なのだから、楽しまないのは大損だろう。

(二度の失点でチームの空気は最悪に近い…………まずはどうにか一点を返さないとな……)

とはいって、自分が出来る事など限られているのだが。

周りを見渡し、チームメンバーの表情を確認する白竜。決意を固めて自分のポジションへと歩いていく。

「…………皆を捨ててたまるか」

そう誰にも聞こえない程の声量で呴く彼の瞳は、漆黒に輝いていた。

「――何か、喜ばしい事でもあつたのですか?」

「……五条。フツ、やはり貴様はかなり洞察力に長けているようだな」

観客席で一人試合を見ている牙山に、突然現れた五条が声をかける。

牙山がニヤニヤと頬を緩めているのは誰の目から見ても明らかではあつたが、そういう事にしておいた方が良いだろうと五条は判断し、言葉を続けた。

「ええ。何せ私の少年時代といえば、鬼に扱かれる毎日でしたからねえ……ククク」

「鬼…………あの反逆者の鬼道有人の事か」

「…………はい。まさか彼がファイフスセクターに反旗を翻すとは思つてもいませんでした。元チームメイトとして、恥ずかしい限りです」

「案ずることはない。究極のチームが完成し、雷門を圧倒させてみせよう。それならば君のその気持ちも少しは晴れるだろう」

「お気遣い感謝いたします」

五条がそう感謝の言葉を紡ぐと共に、牙山は“それでは本題に移ろう”とそう切り出し、試合が行われているグラウンドへと視線を向けた。

その横顔は先程までの柔らかそうな表情ではなく、真剣という言葉をそのまま具現化したような、そんな表情。周りの空気を一変させ、五条に緊張感を植え付けるには申し分ないものだつた。

「白竜について、どう思う?」

そう聞いてくる牙山に、五条は内心で驚愕の表情を浮かべた。

彼が白竜の事を話題に出すことなんて、今までに3回あるかないかだ。…………少なくとも五条の前では。

それぐらい牙山は白竜の実力を認め、また信頼していた。…………だから、五条が疑問に思えるのも別に変な事では無い。

まあ、聞かれた質問には答えようと白竜の方へと視線を向ける五条。確かにここ数日の彼は見違えたよう人に当たりが良くなつていった。…………最も、以前までの彼が協調性が皆無だつた故に、人間として成長したのだろうと五条は勝手に思っていたのだが、牙山はそこは考えていないらしい。

「…………彼はまるで別人のように振る舞っています。これは憶測ですが、支援者Xの言うセカンドステージチルドレンとして目覚めたのかもしれませんね」

「…………？」

「セカンドステージチルドレンとして覚醒した場合、超能力による破壊衝動から人格が壊れる者が多いと支援者Xは我々に説明したじやないですか。…………それを白竜に当てはめるのは疑問や違和感が残りますが、まあ有り得ない話ではないかと」

「ふむ…………」

以前までの五条達が見慣れた白竜は、よっぽどの事が無い限りは仲間を頼る事などなかつた。だが今の白竜は、以前よりも格段に仲間を頼るような…………言うならばバスを主軸としたプレーをしている。不調が理由でそうしていると言われば反論は出来ないが、五条の体験上あの究極厨が合理的な手段を選ぶとは思えないのだ。

それに、五条の瞳に映る白竜の表情は笑みを浮かべている。様々な

教育によつて価値観が歪まされた彼らは、サッカーを楽しいと思う事なんてない筈なのに。ただ究極のみを追い求めている彼らは、サッカーを楽しむという感情を既に捨て去つていた筈なのに。……それなのに、白竜の表情からは容易にそう読み取れた。読み取れてしまつた。

他の誰よりも究極を追い求めていた白竜が突然こうも変わつてしまふというのは、それ相応の——あの白竜の人格が揺らぐ程の出来事があつたのだろうと想像がつく。故に消去法。数多の実験をもつてしても未だ解明されていない、セカンドステージチルドレンとして覚醒したのだろうと、五条はそう予想したのだ。

理由なんてない、ただの予想。だが絶対ないと切り捨ててしまえる確信なんてなくて——非常にめんどくさい事になつてゐる事を実感し、五条は内心で顔を歪めた。

「…………確かに、ファイフス傘下の学校に數カ月前に白竜と同じような状況に陥つっていた者がいたな」

「新雲学園の雨宮太陽…………でしたつけ？」

「ああ。十年に一人の天才と呼ばれる程に才能が有つた時点で、元々彼はセカンドステージチルドレンではないかと私は睨んでいた。
…………まあ、特に機器に反応はなかつた訳だがな」

そこまで言葉を紡いだ牙山は、趣旨がズレてしまつてゐる事に気付いてこの会話を中断。ふと、スコアボードに目を向けた。

0—4で前半戦終了。この状況でも尚、化身を発動させない白竜。この事から彼はもう化身を使えないのだと確信できる。もしくは、何らかの理由で化身を封じ込めざるを得ないという事。とはいゝ、後者はゴットエデンの教官達はそんな事は吹き込まない筈だ。故に前者の可能性が考えられる中では一番高い。そう自分の中で結論を出した牙山は、五条へと指示を下した。

「では、この練習試合が終わつた後にすぐに検査させよう。五条、用意をしてくれ」

「分かりました。すぐに出来るように入念な準備をしておきましょう」

「ああ、頼む」

牙山の言葉を確認すると共に、五条はこの場を去つて行つた。

同じ教官であつても見えない程に素早く去つていく様に、牙山は呆れたように微笑を浮かべる。

ともかく、だ。

セカンドステージチルドレンの可能性がある白竜。例え覚醒していないとしても、それでも何らかの有益な情報は出てくれるだろう。前に検査した少年——雨宮太陽がそうであつたように。

練習試合終了。龍と神

前半戦が0—4で終了し、数分のハーフタイムが取られる。

涼しそうな顔で休憩をとるエンシャントダークの面々とは真逆に、アンリミテッドシャイニングは殆どが未だに息が乱れていた。

強力なシュートを受け続けた蛇野。執拗にシュウに甚振られ続けた白竜。数々のパスに翻弄され続けたその他の面々。これらの要因によつてこの差が形作られている。

「……」

それによつて生み出されたのは、沈黙。

試合で圧倒され、こういつた差でもプライドを傷つけられる。一つ一つが小さくても、それが沢山積み重なつたのだからこうなるのも必然的なものだつた。

「…………ほら、まだ折り返しだ！後半頑張れ——ば——」

この暗い空気に耐えられなくなつた白竜が、空気を変える為に口を開く。だがすぐに皆から睨まれ、次第に弱弱しくなつていった。

——お前が点を決めてくれれば、もつと楽なのに。

——お前のせいで、こうなつてるんだよ。

白竜に向けられた視線からは、こういつた負の感情が容易に読み取れる事が出来た。勿論純粋に領いてくれる者も少なからずいるが、殆どの視線が負の感情を含んでいる。究極を目指している者達にとつて、こんな大事な時に調子を崩してしまつた白竜という存在は邪魔以外の何物でもないのだから。

結局このギスギスとした空気のまま、ハーフタイムが終了。皆自分

の持ち場へと戻っていく。

一人、また一人とベンチを離れていき、この場に残つたのは白竜と蛇野のみだつた。

「白竜……」

「大丈夫。後半も全力を尽くすよ」

蛇野の言葉を遮るように、そう言葉を漏らす白竜。

どこか悲しみを纏つたような表情を浮かべ、自分のポジションへと戻つていく白竜。その背中を見つめる蛇野。彼の視界には、以前までの白竜が持つ聖獣の化身とは真逆の、悪魔のような化身が一瞬映つたような——そんな気がした。

エンシヤントダーク側からの後半戦開始。カイからボールを渡されると、シユウはそのまま白竜の方へと歩いてくる。

それに疑問を覚えて立ち尽くしてしまつた白竜をよそに、化身を発動させた青銅と帆田がボールを奪おうとシユウと対峙。だが、彼の発動させた『ダークエクソダス』が邪魔と言わんばかりに二人を薙ぎ払つた。

そしてその歩みは、白竜の目の前で止まる事になる。

「……白竜、何故笑つている——何で楽しんでるんだよ」

「……?」

その場に立ち尽くす白竜へと紡いだ感情は、『憤怒』だつた。

言葉の意図が分からないと言うばかりにこちらを見つめる白竜を見て、シユウの必死に隠していた怒りは爆発した。

足元のボールを浮かせ、怒りのままに化身の力を纏つたシユートを白竜に向かつて放つ。

「ぐあああっ！」

当然白竜がトラップできる程度の威力ではなく、白竜を吹き飛ばすした後に悠木の足元に落ち着いた。

ここは空気を読んでおいた方が良いと判断した悠木は自身の化身を発動し、体勢を立て直した白竜へとシユートを放つ。

「魔宰相…………ビジョップ！ はあああっ！」

「うあああっ！」

白竜を再び地に倒したシユートは、化身を発動させた林音の足元へと収まつていく。そしてシユートを放ち、再び立ち上がった白竜を吹き飛ばす。カイへと渡り、彼もまた白竜を吹き飛ばした。

エンシヤントダークで化身が使える4人が、白竜を囲んで容赦なくシユートを打ち込んでいく。化身の力が上乗せされたシユートに、この世界に転生してからまだ日が浅い白竜は反応こそできるが、避ける事は適わなかつた。

「白竜、サツカーは楽しいと思える遊びなんかじゃない。人の価値を図る、ただの道具でしかないんだよ」

「ぐつ——うがあツ——！」

「君が一番究極を目指していたよね。なのになんで、サツカーを楽しいとつているんだ？」

ボールが自身の足元に帰つてくると、シユウは吐き捨てるように言葉を紡ぐ。

一拍置き、心の苛立ちを吐き捨てるよう口を開いた。

「君の余計な感情で、僕達を――皆を混乱させるなよっつ!!」

憤怒を露わにして上空へと飛び、背後に聳え立つ暗黒神が振り下ろす斧に合わせて蹴り落とす。

シユウの心情がそのまま具現化したような。そう思つてしまふほどに、溢れ出す暗黒のオーラからは大量の負の感情を感じられた。まるで、シユウにとつての忌むべき対象が白竜に移り変わったかのように。

「魔王の斧ツツ!!!」

凄まじい威力で放たれたシユートは、それ相応の速さも併せ持つている。

例えシユウがかなりの上空から放つたとしても、ボールが白竜の元にたどり着くまでに2秒もかかるない。故に、このシユートに巻き込まれるのは白竜ただ一人。元々制裁のようなものだ。白竜以外を巻き込んでしまつては意味が無い為、その辺りはシユウは考えていた。
――考えていた、筈だった。

白竜がシユウ達に翻弄されてた時、アンリミテッドシャイニングのメンバーは何もしなかった。何も出来なかつたと表現した方が良いだろうか。それぞれの瞳に映る、痛ぶられる白竜。これに介入しようとしたら自分も同じ事をされるのではないかと、恐怖心で足が動かなかつたのだ。前半戦と共に戦い、今の白竜に対しては嫌悪感しか生まれなかつたのも相まって、結論として白竜を助けに行く事は出来なかつた。ただそれだけの事。

だが皆がそんな状況に陥つても、ある一人だけは白竜を助けよ

うと動いていた。

「ぐあああああツツツツ!!!」

一つ、ゴットエデンスタジアムに断末魔が轟いた。

死を、覚悟した。

シユウが踵堕としのような感じでシユートを放つてくる。〈魔王の斧〉は確か原作でもかなり威力が高く、アニメでも最強格のように見て感じていた。そんなシユートが俺の方へと迫つてくるのだから、それはもう死を覚悟しても可笑しくはないと思う。サッカーで死ぬとはこれ如何に。

ああ、折角のイナイレの世界なのにもう死ぬのか。そう、本気で思つていた。

やりたい事もまだやりきれてないし、まず主人公である天馬にも会つてすらない。もしもイナダンの件があつたら、雪村救済とかもやりたかったな。てか雪村つてあの後どうなつたんだろ。ちゃんと戻してもらえたのかな？

……現実逃避していても仕方がないな。そう思つて、瞼を閉じる。先まで虐められてて最早感覚ないけど、痛いのはいつだつて嫌だ。それは全人類共通だと思う。

そう、覚悟を決めたのに。

「ぐあああああツツツツ!!!」

——俺以外の誰かの断末魔が轟いた。

それと同時に、ドサツと倒れる音。恐る恐る目を開けてみると、倒

れ伏す蛇野の姿があつた。

「つあ——」

ふと、そう言葉が零れる。

脳がこの状況を受け取らない。受け取れない。受け取れる、訳が無い。

そう無意識に理解できるほどに、俺はショックを受けていたんだろう。

う。

——俺のせいで、蛇野は大怪我をおつてしまつた。

そんな起こり得る最悪の未来が、俺の脳を渦巻いていく。自分のせいで他人が傷ついた。脳は認めたくない筈なのに、倒れ伏す蛇野を捉える視界が逃がすまいと現実を突きつけてくる。

「つあ」

身体の芯から何かが出て来るような感覚に、そう無意識に呟く。気づけば俺の背後には黒い龍が聳え立つていて。振り向かなくてもその姿が脳に映し出された。

それは、原作白竜の化身——『シャイニングドラゴン』と似て非なる姿。聖獣が墮ちたかのようなその容姿は、無意識だとしてこの化身を発動させている俺自身でも恐怖を感じる程。それ程までに禍々しい姿をしていた。

恐怖や不快といった言葉では言い表せないような、化身に乗つ取られそうなそんな感覚に、徐々に意識が薄れていく。消えかかっていく。

化身に乗つ取られたら二次被害が広がつてしまい、更に皆を不快にさせてしまうだけなのに。それなのに俺の身体はもう“樂”を求めてしまつていた。

「――暗黒龍……ダークバハムート……」

知らない筈のその名前を、無意識にはつきりと口に出していた。

(なんだ……この化身……)

白竜の背後に現れた禍々しい化身を一目見るなり、シユウの頬には冷や汗が零れる。

この禍々しい化身――ダークバハムートから漂うオーラは『シャイニングドラゴン』の比ではなく、『ダークエクソダス』にも勝るとも劣らない程。思わずシユウが後退りしてしまつても何も可笑しくはない。

「見た事ない化身だが関係ねえ！ギヤロップ……バスターアツ!!」

ボールをキープしていた林音が、『ナイト』と共に化身シユートを白竜へと放つ。対して白竜は何も動じずに、さも当たり前のようになラップしてみせた。

「なつ!?

「…………」

林音の口から驚愕の言葉が零れるも、白竜の表情は変わらない。化
身に意識を乗つ取られている彼の脳には、もはや理性は残つてなどい
なかつた。

トラップしたボールが足元に落ちた瞬間、白竜はそのボールを軽く蹴り放つ。軽く蹴ったとは思えない程に威力が高く、どんどんと加速していくシュート。それがゴール前に待ち構える芦矢の元へと放たれた。

「キル……ブリッジイイイイツツ!!!」

先程の「ホワイトハリケーン」を相手にした時とは真逆の、己の有り余る力の殆どを込めた必殺技。だがそれは数秒の拮抗の末、無情にも破られた。

「まだだつ！」

芦矢が全身全霊で止めようとしたのが幸いしたのか、人間には有り得ない位の速度でゴール前へと戻ってきたシユウがその足でシユウトを受け止める。またも数秒の拮抗の末にボールを蹴り返す事に成功し、そのボールは枝木の元へ。

「悠木！」

「ああ！」

化身ドリブル技を持つている悠木に渡した方が良いと判断した枝木は、そのままダイレクトで悠木へとバス。だが悠木がトラップした頃にはすぐそばにまで白竜が迫っていた。

「ツ……！ダークスペ——なにつ!？」

問答無用とばかりに悠木からボールを奪う白竜。それを見越してか、カイが『ルーク』と共に立ちはだかる。

「ストロング……タワアアアツ！」

カイが全身全霊の力を注ぎこんだ何重にも重なる番人の塔は、ただ我武者羅に走る白竜を止めるには容易い。容易い筈だった。白竜がただ前へと進むだけなら。

「なつ!?

——永遠に塔が高くなつていくなら、それを上回る速さで飛び越えれば良い。

〈スカイウォーク〉の要領で上空へと飛ぶ白竜。化身の力も有つての事か、すぐに塔の頂上へと追いついて余裕で飛び越える。そしてそのまま、ボールへと化身の力を注ぎこんでいく。

曰く、聖獣と暗黒龍は一心同体らしい。

曰く、表と裏に分かれていて同一個体との事。

曰く、暗黒龍の力は聖獣の比にもならない程。

——邪龍の咆哮。

力を注ぎ終わると共に、白竜はそのボールを蹴り落とす。その姿はさながら、今までの——原作の白竜の〈ホワイトブレス〉の色違いのようだつた。

「させらかああつ!」

白竜が蹴り落としたシユートに被せるように、化身の力を全て込めたシユウのブロックが入る。チーム内でも飛びぬけて化身の練度が高いシユウでも、徐々に押し込まれていく。暗黒龍と暗黒神の戦いなら、それは勿論暗黒龍の方が勝つだろう。だが——

「俺達の力をシユウに注ぎ込め!」

「こうなつたら意地でも止めるぞ！」

——化身ドローリング。

化身とは人間の気が実体化したもの。それならば、自身の化身の力を一人に集める化身ドローリングは人間全員が出来る筈だ。

シユウの元へとエンシャントダーク全員の気が集まつていく。背後の魔王が斧を振り下ろすと共に、シユウはいつもとは真逆に——下から上へと蹴り返すように、自身の化身技を放つた。

「魔王の斧オオオツツ!!!」

だが、それでも尚互角。暗黒龍はその程度では止まらない。11人の気が合わさつた暗黒神の力も、暗黒龍と互角に押し上げるだけに過ぎなかつた。

「うおおおおおツツ！」

劣勢な事に変わりがないとしても、シユウは諦めなかつた。諦められなかつたといつた方が正しいだろうか。こんな劇的な変化をした白竜が許せなかつた。サッカーを——間接的に妹を殺した魔の球技を。それを楽しいと感じているであろうその顔が、とてつもなく憎かつたから。

そう、全ては妹の為。そう言い聞かせて今まで頑張つて、耐えてきたのに。

(もうやめて！お兄ちゃん！)

声が、聞こえた。

シユウの意識が逸れたその一瞬。暗黒龍が暗黒神を打ち倒し、並の化身シユートとは比べ物にならないぐらいのシユートがゴールへと

放された。

「キル——ぐあああああツ!!」

芦矢が必殺技を出す暇もなく、暗黒龍の力が注ぎ込まれたシユートがゴールネットへと突き刺さる。

痛みを上げる身体に鞭を打ちながらなんとか立ち上がった芦矢の視界に入つたのは、地面へと倒れ伏している白竜とシユウの姿だった。

かくして、試合続行の為の人数が足りない事もあつて、この練習試合は1—4でエンシャントダークの勝利という形で終わりを告げたのだった。

思わぬ邂逅

『~~~~~』

『——.——』

薄つすらと揺らめく意識に、声が聞こえてくる。

視界は薄くぼやけ、身体の感覚もないに等しく漠然とする。だが、次第に開けてきた視界が俺にここでの存在を認識させた。

(……こは……夢か?)

言葉にするならば、全てが真っ白な空間だろうか。

そんな空間の中で佇む俺の視界の中を、まるでスライドショーのように様々なサッカーの試合が流れていく。現実では有り得ない技術なのだから、夢と判断するのに時間は掛からなかつた。

「ようやく起きたか」

「——!？」

周りを見渡していると、突如俺にかなり似たような声が響く。

聞こえてきた方に視線を向けると、そこには鏡で散々見てきた銀髪の少年の姿があつた。

「なつ――白、竜……?」

俺と同じ姿をした少年の姿が、そこにはあつた。

こちらを見渡す彼の姿は、原作の白竜を彷彿とさせる。冷淡で、その瞳はこちらの全てを貫くかのような、そんな印象を与えられる。

「……なんで俺の名前を知つて——いや、これを聞くのは無駄か」

彼はそう言うと、手に抱えていたボールをこちらへと投げてくる。無意識にキヤツチしたは良いものの、趣旨が理解できないでいると、見かねたように白竜が語りかけてきた。

「……サッカー、やるぞ」

ああ、そういう事か。

言葉が足りなそうな彼の事だ。G O 2 や G O 3 では多少は丸くなっていたが、現状ではその性格は変わらないらしい。

「基本は 1 V S 1。詳しいルールは……分かるよな?」

「ん、俺の知ってるルールが合つてればだけどね」

「結構。……最初から全力で行かせてもらおう」

そう白竜が言葉になると、背後には黄金の聖獣の姿が現れる。

頭の中で何度も描いた聖獣が、今対峙している少年の背後にいる。そんな異端な光景に笑みすら浮かべてしまう。

……化身、ね。こうも最初から来られると負け確にしか思えないけども。

化身を覚醒できていない俺が、目の前にいる彼に勝てる訳がない。

まあ、彼なりの理由があるのだろう。そう思つて、こんな負け確のゲームに臨むのだった。

あらゆる点を総合して考えれば、このゲームは大敗だつた。

何故そんな回りくどく結論付けたのかは、結果だけ見れば引き分けにすぎなかつたからだ。約15分もの間白龍に翻弄され、最終的に0-0で終了した。

……彼の思考が分からぬ。原作での彼を思い出してみると、大量に点を取つてゐるイメージしかない。ここにいる彼が本物の白龍だとするならば、その全く違う印象に混乱してしまうのは必然的ではないだろうか。

そんな感じで自分の負けを正当化していると、最後の方で飛んで行つたボールを追いかけていた白龍が戻つてきた。

「お前のホワイトハリケーン、まるで様になつていないな」

戻つてきて最初に言う言葉がそれですか。

もつと労いの言葉をくれ。こちとらただの一般人だが？

「ちゃんと威力自体は出していたのに芦矢に止められた。それは疑問に思つてゐるんだろう？」

それを耳にした瞬間、自分で彼に対する警戒心が一気に溢れた。

何故あの試合を知つてゐるのか、何故そんな細々と覚えているのか。有り得ても観測者の立場でしかないのであろう彼が、何故これらの事を知つてゐるのか。

「……何でそれを知つてゐる」

「何でつて、俺はお前だからに決まつてゐるだろ」

その言葉の違和感に、何かが引っかかる。

そう。彼が言葉足らずである事を差し引いても尚、その言葉が意味

するもの。

もしかして彼は……。

「……そろそろ時間か」

俺の思考を遮るように白竜が言葉を紡ぐ。

彼の向いてる方向を見てみると、何もない世界が崩壊しかかっていた。

「……また、会えるかな？」

思わずそう言葉にしてしまう。

そう思えてしまう程に、先までの彼との練習は有意義なものだつた。自分がどんどん成長していく事を実感出来たから。

「会えるさ。……お前自身が、自分の化身を信じる事が出来たならな」

崩壊する世界の中で、彼はそう言葉を紡いだ。

「——っ！」

瞼を開き、飛び起きる。

先程までいた彼の姿は見当たらず、空間も元の部屋——もう見慣れ始めてきた自分の部屋へと戻っている。

どうやら、あの夢から目が覚めたようだ。恐ろしく冷静な自分に恐怖さえ感じる。

「……自分の化身、か」

起きてすぐに浮かんできた疑問は、夢が覚める前に彼が言つた言葉。

その言葉から察するに、俺の中には自分だけの化身が眠つていてる。……のだろうか。

白竜の持つ聖獣とは全く違う、そんな化身が。

——考えれば考える程、頭が痛い。

それに、夢に現れた彼の——白竜と思われる存在の事も疑問に残る。

まず最初に考えられるものとしては、この身体の元々の持ち主。彼がオリジナルの——原作の白竜だとしたら、同じ精神故に「シャイニングドラゴン」は発動できるし、あの化け物染みた身体能力や必殺技にも、その身体を使いこなせていると考えれば説明がつく。夢の中だから出来るという事も考えられるが、それならこの疑問全てが無と帰る為一旦置いておこう。

でも、それだとやはり新たな疑問が生まれてしまう。

身体を——人生を奪つてしまつた俺の事を何故恨まないのか。普通ならば、今回のように夢で会えたら真っ先にコテンパンにするだろう。なのに何故彼は特訓紛いな事をしたのだろうか。彼にその考えは無かつたのかもしれないが、あの1 vs 1 のミニゲームで俺が成長できたのは事実に違ひはない。そういう言葉があるのかは分からぬいが、『仇を恩で返す』が一番しつくりくる状況だった。

それに、『俺はお前だからに決まつているだろ』という言葉。多分その意図は解釈によつて違うだろうが、俺の存在を認めているという事がまず可笑しいと感じてしまう。その点においても、彼が原作の白竜と同じ存在とは思えないのだ。

かといって他に思いつくものもなく、彼の存在はまったく分からぬい。まあ、知つた所でというのはあるけども。

ただ、あのように夢に現れたという事は何らかの目的が彼には有つたという事だ。最初の邂逅の時の口調から、あれは偶然引き起こされた

たものではないだろう。

……ではそこから考えられる、彼の目的と呼べるものは——。

「——起きたのか。白竜」

「うおわあ!?」

突如野太い声が部屋に響き、それに驚いてベットから思いつきり転げ落ちる。

「何をやつているのだ。貴様は」

「牙山教官……?」

痛む腰を擦りながら声が聞こえた方に顔を向けると、そこには大熊^{：ゲフンゲフン}。牙山教官の姿があつた。

呆れたような表情で佇むその姿を見ていると、何故か無性に腹が立つてくる。胡散臭い人を見ると腹が立つというのは本当らしい。

「……起きたのならば、さつさと練習に行け。この前の試合は酷かつたぞ」

ん? と、牙山教官の言葉に違和感を感じる俺。一見何も可笑しくもないようすに聞こえるが、この違和感は何なのだろうか。
ああ、そういう事か。

「俺つてどれぐらい寝てたんですか?」

「ん? ああ、丁度三日間ぐらいだな」

成程。道理でこんなにも喉が渴いている訳だ。

それに気づいてからというもの、喉の痛みは増していくばかり。食堂で水を飲んでから練習に行こう。

「……ああ、そうだ。貴様、この前の試合の事をどこまで覚えている？」

何故かユニフォームを着ていたままだった為、また小言を言われる前に部屋を出ようとしていたのだが、玄関の前で牙山教官の紡いだ言葉に阻まれる。

それにして、どこまで覚えている？　か。ここまで牙山教官の言葉に違和感を感じるのは可笑しいと思つていただけど、まず大前提であるお互いの記憶。その違いが生んでいたとは。

依然としてその意図は分からぬが、取り敢えず本当の事を伝えておこう。下手に改竄してごちゃ混ぜになつてしまつては目も当てられない。

「蛇野が俺の事を庇つた所ぐらいまでですかね」

シユウの〈魔王の斧〉が蛇野に当たつて、その後すぐに俺の視界も暗転した。少し靄がかかつたような感じだからその記憶に確証は持てないが、多分その通りに事が進んだんだろうと思う。

当事者の情報を得て満足したのか、ニヤリと笑う牙山教官。普通に気持ち悪いから辞めて欲しい。

……でも、これでもゴットエデンの管理者とも言える人物だ。化身については熟知しているだろう。

「……教官は、誰もが有り得ないと切り捨てるであろうものを、信じる気にはなれますか？」

だからこそ、どんな情報でも良いからその知恵を貸してほしかつた。

こんな回りくどい聞き方でも、与えられる情報はそれに見合わない程大きなものだろうから。

「信じるさ。詳細はあまり言えないが、そういうのには既に身をもつて実感している」

そう即答する牙山教官。

既に実感している……S セカンドステージ S セカンド C チャーチルドレン の事か。そりやそりや。アスレイ・ルーンがSSCについて彼に教えたから、ゴットエデンでの教育がここまで過酷になつたのだから。

まあ、信じてくれるなら本当にありがたい。変に怪しまれるよりは全然良い。

「それなら、同じ人物が複数の化身を出せると言われて、信じますか？」

俺が本来の白竜ではない事を隠しながら訊かないといけなかつたから。だからこんなにも回りくどくなつてしまつたが、今の疑問を解決するには必要な事だ。

俺のこの言葉を聞いて困惑したのか、そのような表情を浮かべながら牙山教官は口を開く。

「……まあ、そうだな。まだそれを証明出来ていないのだから否定はできまい。それに——」

そこで牙山教官は一拍置き、再度こちらを見て、

「——いや、なんでもない。どうやら貴様は覚えていないようだからな」

「……なんですか、それ」

ガクツと、その言葉通りに俺の身体は崩れ落ちる。

散々期待させておいて、いくら何でもこれはないだろう。あまりに酷く、無責任な応答だ。

……まあ、人生はそんなに上手くいかないものだ。

未来の心配をするんじやなくて、今生き残る道を見つけないとけない。イナイレ世界なら尚更だ。

その為にも練習。ずっと寝込んでいたのだから、今まで以上に練習しないといけない。

そう思い、俺は皆が練習してるであろう屋内グラウンドへと足を進めるのだつた――。

——視界に広がる景色は、数多の練習で見慣れた屋内グラウンドとは別物の、大自然に囲まれた森のような場所だつた。

……可笑しい。入ってきたドアもいつの間にか消えているし、まず養成施設の周りにこんな森なんてない。まさしく超次元な状況に、興奮を通り越して呆れさえ出て来る。

まあ、少なくとも現在の技術では無理な話だ。G O 3のように宇宙の技術を使う以外に、現在こんな状況を作り出す技術なんてないのでから。

「キミが僕の『先祖様だね？ 白龍クン？』

ああ、やっぱりそうか。最悪だ。

声が聞こえた方に視線を向ける。大自然に聳え立つ大樹の太い枝に座っている、少年の姿が視界に入つた。

小柄な体格で、顔の大部分が銀色の仮面で覆われている。そして見

る者全てに恐怖を与える、そんな無機質な瞳。

ゲームでは黒岩流星に召喚されていた、グランドチルドレンの一
人。

——ハッシュ・シルヴァンの姿がそこには有つた。

天才と天才。故に天才在り

「困るんだよねえ。キミのせいで僕の存在自体危うくなるんだから」

と、俺の方を睨みながらハツシユ・シリヴァンが口を開く。

その手には変わらず銀色のスファイアデバイスが握られており、俺に攻撃する準備は既に整っていると、そう嫌でも感じさせられる。

仄かに怒っているようにも見える彼の表情。その無機質な表情からは恐怖すらも感じられて……。足が、腕が、喉が……身体の全ての箇所が思うように動かない。思い通りに動かす事が出来なかつた。

「あれ？白竜クンの事だから『子孫…？』ぐらいは驚いてくれると思うんだけどなあ。まあ、無理もないか」

睨むばかりで声を発さない俺を見かねてか、ハツシユがそう言葉にする。

それと同時に、彼の身体は空を斬つた。

「ぐ、ウ——!?

ミシリ。と、そんな不快な音が身体から響く。

……骨、折れちゃつたかな。体内で出血してるような感覚あるし。反応出来なかつた。目に見えなかつた。——そんな単純な原因でも、いざこう現実を突きつけられると本当にどうしようもなく感じてしまう。

「……こんな遅い蹴りも避けられないのか。歴史に名を刻んだ“ジー
ド”という存在が、聞いて呆れるね」

「う、つせ——」

「――強がりもいい加減にしなよ」

……容赦なく踏みつぶすのは辞めて欲しい。切実に。

てか転生して強く実感したけど、この世界つて話聞かない奴多いな。それと短気な奴。確かにアニメやゲームとして見ていた頃も少なからずそう感じていたけど、いざ当事者目線になると本当に辛い。

「……キミ、この世界の存在じやないだろ？」

「つ――!?」

そんな確信を突いた彼の言葉に、一瞬で現実へと引き戻される。ハツシユの表情が視界に入るように目線を上げる。……相変わらず無機質な表情で何を考えているのか分からぬ。

「ぐあ――！」

……まじで痛い。死にそうなぐらい痛い。

お互いの視線が合った瞬間、俺の身体はハツシユに蹴り飛ばされた。なんとか崖に落ちる寸前に踏みとどまれたが、蹴り飛ばされた衝撃で視界が大きく歪む。

そんな俺にも容赦はしないとばかりに、ハツシユの身体から吹き出てきた影が徐々にその形を形成していく。

「聖獣シャイニングドラゴン」

一言、ハツシユがその名を告げる。それと共に、影を払つた白銀の龍が現れた。

何度も対峙し、何度も思い浮かべた、そんな化身。“白竜”という名にふさわしい、聖の輝きを纏つているドラゴン。

『困るんだよねえ。キミのせいで僕の存在 자체危うくなるんだから』

脳裏に、先程彼が言つていた言葉がリピートされる。

……ああ、そういう事か。

子孫と名乗つていた彼もまた、俺の憑依によつて被害を受けた一人だつたんだな。

同じ身体でも、その精神が違えば行動すらも変わつてくる。そう考えれば、本来繋がる筈だつた血筋も途絶えてしまうのは必然的な事。流石に原作でもそのキャラの未来までは描写されるケースは少ない。

——全て、俺が悪い。

薄々感づいていた事だが、理性がそれに気づいてしまつた。

原作キャラに憑依してしまつたというのは、そういう事なのだと。

原作の展開だけでは止まらずに、本来生まれる筈だつたキャラすらも生まれないというのは、あまりにも酷く、あまりにも自分勝手じやないのか。

例え望まずに突然憑依したのだとしても、それはハツシユ、……そして本来の白龍への言い訳にはならない。俺が彼らの人生を奪つてしまつた事には変わりはないのだから。

そう考えれば、彼の——ハツシユの気持ちも分かる気がする。

ほんのりと感じる怒りの感情は、全てを台無しにした俺に対する憎しみなのだろう。そしてハツシユのこの行動は、どうにか俺だけ消して元の白龍の精神に戻そうとしているんだと思う。

——それならば、俺だけがいなくなる分には良い事なんじやないか。

「ホワイトブレス」

ハツシユがそう呟くと共に、「シャイニングドラゴン」へと聖なる力が集まつていく。そしてその力が最頂点に達した時、スフィアデバイスと共に彼は空高くへと飛びあがつて——。

「はあっ！」

全力の一撃であろうシユートを、俺の方へと放ってきた。
彗星の如く放たれたソレは、俺の事を突き飛ばして崖から転落させるには申し分ないものだろう。

だけど、俺は避けない。避ける事など許されない。

確かに崖から落ちたら致命傷は避けられないし、多分この高さなら命を落としてしまう事が確率的には高いだろう。……そんな事、分かってる。

分かってるからこそ、それが頭にあるからこそ、俺は避ける事など許されないんだ。

ハツシユも腐つても未来人だ。その200年後の技術とやらでどうにかしてくれる筈。

ここで死ぬことで、彼らへの罪償いが出来るのなら。

ここで死ぬことで、この後ろめたさから解放されるのなら。

そう考えると、不思議と死に対する恐怖感は消え去っていた。ハツシユも自身の生存の為にも『白竜』という存在は消さない筈だ。それなら彼に全て任せても良いじゃないか。彼らの思いを背負つて生きていく程、俺は出来た人間じやない。

そう思つて、実際に一步近づいていたのに。

——ガキンッ！。

ハツシユの放つたシユートは、どこからか現れた黒い大剣に遮られた。

どこか見覚えのあるそんな光景に、混乱を通り越して後悔さえ出てくる。

「悪いけど、これ以上は見過ぎせないよ」

見覚えのある紺色の髪。突如降臨した化身が『ダークエクソダス』

だつたという事も相まって、現れた存在に相当な既視感を覚える。でも、どうやら現れたのはシユウではないらしい。

「まさか女の子に止められちゃうとはなあ。キミ、何者？」

赤いラインの入った白のワンピースを身に纏い、赤と白のリボンでポニーテールに結ばれた髪型。ハツシユが言葉にした通り、女の子の姿がここにはあつた。

——まさか、もう一人の亡靈を目覚めさせるとは思つてもいなかつた。



なんだかんだ、人が一番嫌がるのは“自由を縛られる”という事だろう。

「ああもう！別に元気なんだだから問題ないじやないか！」

故に、病院の一室で橙髪の少年——雨宮太陽はそう叫んだ。

かなりの重い病気を幼少期からの長期間患つてゐる彼からしたら、ここ数週間程症状が出てないのだからもう病院に幽閉される必要性はない。昨日も一昨日も一人でサッカーをして、それでも症状が出なかつたのだから、別に運動を制限される必要はない筈なのだ。

……と、担当医や看護師が部屋に来る度に説得してはいるのだが。

「ダメです！そんな事をして、また再発したらどうするの！安静にしてないとダメ！」

「冬花さんの分からずや！」

「それは太陽君の方でしょ！」

と、毎回このように怒られてしまつて いるのが現状だ。

勿論、今太陽を叱つた看護師——久遠冬花の言い分も間違つてはいな。というよりは冬花の方が一般常識としては正しい筈だ。……雨宮太陽という存在が普通ならば。

（転生者つて事は言えないし……僕ももつとサツカーしたいんだけどなあ……）

それなりにアニメや漫画等に精通しているのであれば分かる単語にして、今の太陽の状況を形作つて いる原因。でも正直に言つた所で冗談だと思われるだけだ。それに下手したら厨二病の方の人間だと誤解されかねない。故に太陽は自身が転生者という事を誰にも伝えていないので、そのせいでこんなに面倒くさい状況になつてしまつているのは何たる皮肉だろうか。

因みに病気については既にほぼ完治していると太陽は認識している。彼が転生する前の太陽——本来の太陽の記憶をそのまま受け継いでいるからか、転生して間もない頃にその違和感に気づく事が出来ていた。

それは、彼の精神が憑依する前に比べて明らかに身体が楽になつて いた。というもの。

例えるならば、彼の精神自体がその病気に対する特効薬のような。 そう的確に当てはめられる程に、彼の転生秘話は上手く出来すぎてい た。まるで“運命”がそう導いて いるかのように。

とはいえ太陽もそこまで深くは考えておらず、『治つたのかラツ キー』ぐらいにしか思つてい ないのだが。

『ゴオールツ!! 白恋中、強豪雷門から先制点を奪いましたアアツ!!』

「……ん？」

拗ねて布団に包まつていた太陽だが、テレビから聞こえてきた実況の声に思わず声を上げる。

今まで冬花と言い争いをしていて気づいていなかつたが、どうやらホーリーロードの二回戦が既に始まつていたらしい。

「おっ、雪村が決めたんだ！……ブロッコリーは相変わらずだなあ」

視界に映る情報を思わず声に出してしまう。

どうやら試合開始と共に白恋の10番——雪村がシュートを放ち、雷門のGK——三国が反応できずに失点を許した形らしい。

試合再開まで流されているリプレイ映像をワクワクとした目で凝視。まるで犬のような。まるで子供のような。そう見える程に太陽の心は好奇心で満ち溢れている。

ファイフスセクター関連など今の太陽には関係ない。ただサッカーが好きだから。彼らと同じグラウンドに立てるのが楽しみだから。純粹な好奇心しか今の太陽には無いのだ。

「こうしちゃいられない！練習練習～と！」

雪村のシュートに感化されたのか、彼らと同じように——このホーリーロードを始め、これからどんどんと来るであろう大規模な大会で活躍する自分を想像する太陽。

沸きだつ観客、自分で繋げてくれた味方。彼ら彼女らの声援の中で、自分が放つたシュートがゴールへと叩き込まれる。そんな、原作通り進むならば絶対といつて良い程約束された未来。折角この世界に転生したのだ。夢にまで見たそんな未来を掴み取る為にも、まずは自分の実力を彼らと渡り合えるぐらいまで上げなければならぬ。
——こんな所で寝てる暇なんて無いのだ。

幸いにして冬花はもう既にこの場を離れており、見張りはない。

こうなつてしまつては太陽の独壇場だ。ベットの下に隠していた靴下とスニーカーを取り出し、新雲学園のサッカー部から差し入れで貰つたサッカーボールを抱える。

廊下は沢山人がいるから見つかる為却下。病院の一個室で廊下以外から外に出れるのは、窓しかない。

「やつほーいっ！」

もう慣れたと言わんばかりに窓を開け、足を掛け、飛び降りる。3階という普通の人間なら大怪我を負う程の高さだが、太陽のその高度な運動神経がこの行動を可能にしている。

問題なく着地し、見つからないようにすぐに建物の陰へと走る。運良く周りに誰もいなかつたのが功を奏し、誰の目にも止まらずに建物と塀の間にある木々に囲まれた空間へ辿り着いた。

大事そうに抱えていたボールを足元へと落とし、取り敢えずリフティングを開始。そして、どの技を覚えようか思案し始める。

取り敢えずは覚えやすそうな技からやってみるべきだろう。原作の太陽は化身のみで二期序盤まで戦えていたが、それと同じ事をやれと言われても酷な話だ。それに多彩な必殺技は覚えておいて損はない。故に――。

「スパイラル……ショットツツ！」

いつもよりも回転を掛けてボールを蹴り上げ、そのまま金網へと蹴り放つ。初めて覚える必殺技にしては上々だろう。

「成功だ！ よーし、次は――」

何事においても成功は、更なるやる気の向上に繋がる事が多い。

一回目で成功した事に喜びを覚えながら、太陽は次に覚える技を何にしようか思案し始めるのだつた。